

県研究主題

コミュニケーションの素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 村井 健治（中地区）

<研究主題>

コミュニケーションを図る楽しさや大切さを感じさせる外国語活動をめざして
～子どもも先生も楽しめる外国語活動を目指して～

1 提案内容

(1) 伊勢原市の外国語活動の取組

市内の小中学校が連携・情報交換をしながら積極的に外国語教育に取り組んでいる。
大山小学校は教育課程特例校の指定を受け、低学年から年間 35 単位時間の外国語活動を実施したり、高学年で教科としての外国語に取り組んだりしていて、伊勢原市の英語教育の推進に大きな役割を果たしている。

(2) テーマ設定について

外国語に興味を持ち、楽しむことのできる活動を展開することで、積極的にコミュニケーションを図る態度を育成できると考えこのテーマを設定した。

また、教員がモデルとなり、児童とともに英語を使ったり、積極的にコミュニケーションを図ることを楽しんだりすることで、外国語活動が充実すると考え、この研究を進めた。

(3) テーマに迫るための手立て

ア クイズの活用

児童が楽しくコミュニケーション活動を進めるために、ピクチャークイズ、漢字クイズ、シルエットクイズ、音あてクイズ、スリーヒントクイズなど多様なクイズを活用した。

イ 絵本の活用

コミュニケーション活動のツールとして絵本を活用した。印象的なフレーズを聞かせたり、言わせたり、内容について尋ねたりしながらコミュニケーションが進んだ。特にオックスフォード、リーディング、ツリーシリーズが読み聞かせを行いやすい。

ウ 振り返りカードの活用

児童による授業の振り返りや評価の充実をねらいとして振り返りカードを活用した。授業中の見取りによる評価を補うものとなり、次の学習の改善にもつながるものとなった。

(4) 授業実践

『My favorite quiz.』 “What’s this?” “It’s～.” という表現を使ったクイズ

相手の話を聞き、相手の好きなものは何かを考えて、正解をさぐるということを行った。

(5) 成果

ア 教材の工夫

絵本の活用により、和やかな雰囲気をつくり、児童の授業への興味・関心を高めることができた。また、クイズにより、日常ではわからない友達の一面を知ることができ、自分自身を表現する喜びや楽しさを味わわせることができた。

イ 伝えることの大切さ

児童同士で ALT が言っていることを推察したり、教え合ったりする姿が見られるようになった。また、英語を使うことへの抵抗感も感じられず、進んで自己表現する児童が増えた。

ウ 振り返りカード

振り返りカードの活用により本時のねらいを児童と共有できるとともに、評価の充実が見られた。

(6) 課題

十分にコミュニケーションを図る「大切さ」を多くの児童が感じるまでには至っていない。コミュニケーションの必要性や良さを学習の中で感じた、その大切さに気付ける学習活動の展開が求められている。

2 協議内容（質疑・応答）

伊勢原市で教育課程特例校となっている大山小学校の高学年の短時間学習（モジュール）の取組が紹介され、その中で外国語活動に全ての教員がかかわることの大切さも示された。

絵本の活用については、どのような絵本を準備し活用するのかということについて、いくつかの小学校の実践例が示された。

また、書くことの指導についても実践が報告されるとともに、今後の指導のあり方についての不安も出された。ローマ字とのつながり、フォニックスの活用にも協議が及んだ。

文部科学省の委託事業である英語教育強化地域拠点事業で先進的な取組がある横須賀市から読み書きを含めた実践や振り返りカードの成果について紹介があった。

3 まとめ

(1) テーマと学習指導要領の目標、3つの柱との整合性がある。

(2) 絵本の活用について

絵本の活用を通して、聞いてわかることを体験させていく。聞いてわかる体験をさせやすい本を上手に活用する。文部科学省の HP にも中学年用と高学年用の本が紹介され、デジタル教材としても利用できるように用意されている。利用できそうだとする本を1冊でも多く教員が活用していくことが求められる。

(3) 振り返りカードについて

中学校では、英語を使って何ができるかを CAN-DO リストの形式で示している。小学校でもどんなことを理解し、慣れ親しんでいくのかを考えていくことが有効ではないか。各地区でも目標、指導、評価、そして次の学習へのつながりを意識した振り返りカードの話題が出たように、活用方法を考えていく必要がある。

提案 2

提案者 轡田 亜子（川崎地区）

<研究主題>

『聴きたい 知りたい 伝えたい』～かかわりを大切にした外国語活動の工夫～

1 提案内容

(1) 外国語活動の研究に取り組む教職員の思い

「外国語活動になると進んでかかわろうとする児童を生かしたい。」「かかわりを目的として児童にとって必要性や必然性のある外国語活動をしたい。」「グループで協力した

り、自分で考えて伝えたりする活動ができれば、主体的に外国語活動に取り組めそう。」という教員の思いから、「聴きたい」「知りたい」「伝えたい」という思いをもって活動できるような場の設定を考えた授業づくりを行った。

(2) 育てたい児童の姿

子どもの実態をふまえ、コミュニケーションの態度を中心に

- ・低学年：自分から進んで「話そうとする子」
- ・中学年：自分から進んで「友だちとかかわろうとする子」
- ・高学年：自分から進んで「双方向のコミュニケーションを楽しもうとする子」

と各学年が何を目指していくのかを意識して「育てたい児童の姿」を設定した。

(3) 児童が主体的にかかわるための手立て

児童が「自分が使いたいときに使える言葉」として「あいさつ」「あいづち」「ほめ言葉」を児童の実態に応じて設定し、積極的に慣れ親しみ、活動の中で自由に使えるようにした。

(4) 英語に触れる環境づくり

① 環境部会による校内環境整備（いつでも目にする、自然と耳にする環境）

階段、廊下にアルファベットや動物の名前などを掲示している。大型の掲示板では月ごとに行事の名前や月に関係するものを扱った。朝会の入退場や休み時間の放送などで、英語の歌を繰り返して流すなど、環境づくりに努めている。

② 学年やクラスでの学習内容に慣れ親しむ環境づくり

活動で使用した絵カードなどを教室や廊下に掲示して振り返り、授業後などに触れられるようにしている。

③ 作成した教材を使いやすいように整理し、保管する。

絵カードなどは保管する場所を決め、誰でも、どの単元で使用するのかわかるように一覧にするなどの工夫に努めている。

(5) 授業実践と成果と課題

各学年の「育てたい姿」をもとに、どのようなことを、どうやって身に付けるかを意識した外国語活動となった。学級担任が授業を行うと安心して取り組み、活動の楽しさから思いを伝え合うようになった。クラスルームイングリッシュ（外国語の授業の中で使用される、あいさつや指示、質問、依頼、激励などの表現）を意識して使っていくことで児童が使えるようになっていく。掲示物も効果があり、アルファベットに慣れ親しんでいる。英語は苦手だと思っている教員も繰り返すうちに慣れてきている。

2 協議内容

低・中・高学年の学年部で系統的に外国語活動のねらいや指導が形成されていることが評価された。教室掲示や自己評価カードの成果について協議が進んだ。掲示物は児童の文字への関心・意欲を高め、自己評価カードは児童が学習を振り返るために効果的である。

今年度始めた短時間学習（毎週2回、昼の時間を使って15分の学習）についても紹介があった。外国語に慣れ親しむ機会が増え、それを習得につなげる実践が報告された。

3 まとめ

思いがないと始まらない、深まらないという意味において、「育てたい児童の姿」が明確

であることが求められる。

「あいさつ」、「あいづち」、「ほめ言葉」の手立ては、自己肯定感をはぐくむために優れている。掲示物も豊富にして、文化の違いに気付かせるきっかけを作ることができている。それも学校全体としてチームでできている。その成果として児童は普段から英単語に慣れ親しむことができている。また、児童がカタカナ英語などと関連付けたりして身近なところから気付くきっかけとなっているし、英語に限らず、ほかの文化に触れるきっかけにもつながるだろう。

学級担任主体で授業を行う利点は、不安を取り除き、活動をただ単に fun で終わらせるのではなく interesting になる授業を組み立てられることである。

コミュニケーションがうたわれているのは外国語活動だけなので、相手意識を培い、他の教科ともからめながら学級の雰囲気を作って人間関係につなげていく。コミュニケーションを英語で行うとできてしまう不思議さを使って、いろいろなコミュニケーションを仕掛ける、気付かせることも外国語活動の魅力である。

◎協議の柱に即した協議

1 協議の柱と主な内容

『外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさや大切さを感じさせる指導・評価の工夫』

外国語活動において充実した言語活動、コミュニケーション活動を進めるには、ネイティブ・スピーカーの活用をはじめ、他学年との交流や他教科・領域との横断的な指導等、児童にとって英語を使う必然性を備えたものである必要がある。

また、実際の指導については、児童の実態を理解している学級担任が当たることで、他教科との関連や表現活動が苦手な児童への配慮などが意識され、より効果的な指導が生まれることが期待できる。学級担任は、よきコミュニケーターとしての児童のモデルとなることも期待される。

振り返りカードの活用は指導と評価の改善に大変有効である。児童のもっとやりたい、知りたいを拾い、次へつなげていき、評価に生かすことができる。

また、コミュニケーション能力の素地は外国語活動に限らず、学級経営においてもコミュニケーションの場を広げ、児童同士のつながりをつくることができる。

2 まとめ

今年度の提案は、どちらも、目指す児童の姿、身に付けさせたい力に基づく活動の実践報告であった。児童も教員も楽しみながら、外国語活動のねらいが達成できる言語活動を行う必要がある。

振り返りカードは授業のはじめに配り、「本時のねらい」や「目指す姿」を教員と児童が共有するために有効である。また、教員からのコメントを添えるなど、児童のよさや成長を評価することが不可欠である。

次期学習指導要領では、小・中・高等学校のつながりを意識することが求められる。接続について研究し、それぞれの指導の成果を見取りながら連携していく必要がある。